

序 文

西川長夫

このシンポジウムの趣旨とシンポジウムを行うことになった経緯に関しては、シンポジウムの実行委員長である高橋秀寿さんからすでに説明がありました（趣意書「開催にあたって」をご覧ください）。私はこの報告を始めるにあたって、そこで述べられていることのなかから次の二点を改めて強調させていただきたいと思います。

第1点は、このシンポジウムは「国際シンポジウム」と銘打たれていますが、それにふさわしく国外から多数の方をお招きしています。韓国からは報告者としては漢陽大学の林志弦（イム・ジヒョン）、尹相仁（ユン・サンイン）先生をはじめ、金恩實（キム・ウンシル）（梨花女子大学）、マイケル・キム（延世大学）先生に来ていただきましたが、その他漢陽大学の比較歴史文化研究所の数人のスタッフの方々（紹介は別の機会にさせていただきます）に参加していただいております。中国からは孫歌（スン・グー）先生（中国社会科学院）、台湾からは周婉窈（ツォ・ウンヤォ）先生（国立台湾大学）をお招きすることができました。また国内からも京都に限らず、北海道や新潟など各地から参加いただきました。多忙の中、貴重な時間を削いで私たちのシンポジウムにご参集いただいた皆様方に心からお礼を申し上げたいと思います。

このシンポジウムのプログラムと参加者の顔ぶれをご覧になった方は、おそらくこれは「東アジア」あるいは「東北アジア」の諸問題を議論する集まりだろうと考えられたのではないかと思います。私たちシンポジウムを組織する側も、そのことは十分意識していたつもりです。私自身も全体のタイトルを「グローバル化時代の植民地主義とナショナリズム」の代わりに「東北アジアにおける植民地主義とナショナリズム」としてもよいのではないかと思ったことがあります。そうしなかったのは、「東アジア」や「東北アジア」と言ったときに私たちがとらわれがちなる種的前提や思考の型を感じてしまうことがあって、もう少し自由な形で考え、別の角度から議論をしたいと思ったからです。もちろん私たちは「東アジア」問題を避けて通ろうとしているわけではありません（実は私自身も先日〔9月10日〕にソウルで行われた東北アジアに関する国際会議「東北アジア協力への模索：ナショナリズムと普遍主義の調和」東北アジア歴史財団主催、に参加して深い感銘を受けて帰ってきたところ）です。

今回のシンポジウムでは、外交官的な社交辞令はやめにして、むしろ各人の立場を明確にした、厳しい対立や差異の認識を通じてこの問題に対する私たちの理解が一層深められることを願っています。そしてさらに希望を言わせていただければ、京都ではなくとも東アジアのどこか別の場所で今回のシンポジウムの続きが行われることを願っています。

第2点は「経緯」に関することです。趣意書の説明にもあったように、このシンポジウムは、昨年の9月20日に漢陽大学で行われたシンポジウムの続編として計画されました。私たちの提案に快く賛同していただき、韓国で参加の呼びかけをされると同時に自らも報告者として参加

していただいた林志弦先生と尹相仁先生に改めてお礼を申し上げたいと思います。私たちは植民地主義研究会のメンバーや実行委員を中心にして、漢陽大学で行われた議論をより深めさらに展開させるにはどうすればよいかを考えました。テーマを植民地主義からさらにナショナリズムの方に展開させるのは、そのときの議論からむしろ自然の成り行きだと思いますが、もうひとつ問題を日韓の関係に限らないでより広い視野の中に置いて再考することができないだろうか、ということです。煮詰まって出口を見出せない日韓関係は中国や台湾やあるいはベトナムから見たら、どう見えるか、あるいは東アジア全体に及ぶグローバル化の流れの中で、新しい植民地主義やナショナリズムは、それぞれの地域でどのように異なった（あるいは共通の）意味をもち、形をとっているのだろうか。ベトナムからの招聘は結局実現しませんでした。幸い中国からは日本滞在も長く、『アジアを語ることのジレンマ―知の共同体を求めて』（岩波書店、2002年）、『竹内好という問い』（岩波書店、2005年）などで独自の視角から発言を続けておられる孫歌先生をお招きすることができました。また台湾からは最近日本でも翻訳が出版された『図説台湾の歴史』（平凡社、2007年）の著者である周婉窈先生にお願いしました。お引き受けいただいた二人の先生に心からお礼申し上げます。もっともこのような言い方になってしまいましたが、お二人に中国や台湾を代表していただくつもりはなく、それぞれに個人として自由な発言をお願いしたいと思います。

昨年9月の漢陽大学でのシンポジウム以来、私たちは今回のシンポジウムにつなぐ幾つかの試みをしてきました。その一つは昨年の11月から12月にかけて5回にわたって行われた「連続講座」（「グローバリゼーションと植民地主義」）で、5回の講座のテーマだけを記すと以下の通りです。Ⅰ「いまなぜ植民地主義が問われるのか」（11月3日）、Ⅱ「国内植民地主義をめぐって」（11月10日）、Ⅲ「グローバル・シティの問題 上海／東京／大阪」（11月18日）、Ⅳ「反植民地・反グローバル化運動」（11月24日）、Ⅴ「戦後と植民地後―戦後日本をどう考えるか」（12月1日）。この連続講座の記録は、漢陽大学で行われたシンポジウムの記録（『批評』誌の特集）の日本語訳とともに、『立命館言語文化研究』2007年18巻1号に収められているのでご参照ください。今回のシンポジウムの出発点がどこにあり、すでにどのような議論が行われてきたかをご確認いただけたらと思います。（なおごく最近の試みとしては私たちの研究会のメンバーでもある小樽商科大学の今西一先生を中心に「北海道と国内植民地」をテーマにしたシンポジウムが札幌で（8月3日、4日）行われ、京都からも院生を含めて十人ほどが参加しました。国内植民地主義の問題を中心に、充実した興味深い11の報告と議論が行われましたが、残念ながら全体の記録は残されていません）。

プログラムをご覧いただければお分かりのように、今回のシンポジウムは3日間にわたり、4つのセッションと「全体の総括」とから成っています。第1日（10月19日）は「問題提起」。第2日は午前が「ジェンダー論の視座」、午後からは「現代ナショナリズムの諸相」「中国・台湾・在日」、となっていますが、各セッションのタイトルは一応の区切りであり深い意味はないので、報告者やコメンテーターの方々にはご自分の意見を自由に発言していただければよいと思います。今回のシンポジウムの特色の一つは第三日目に「自由討論」の時間を設けたことで、はじめの2日間に提出された問題の論議をさらに深めることを目指しています。シンポジウムは多くの場合時間不足で議論を尽くせないことが多いのですが、この三日目は報告者・コメン

序 文（西川）

ティター・フロアの区別なく，参加者全員が同じ資格で発言し，シンポジウムのより充実した，真の形が実現することを願っています。三日目で皆様お疲れのこととは思いますが，どうか積極的にご参加ください。

